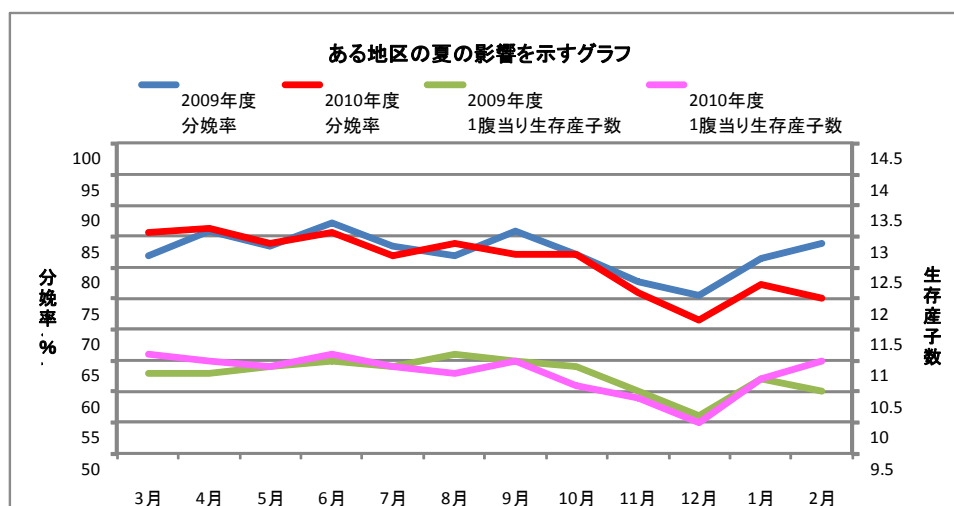


## 母豚を生かすは管理者の知恵と工夫

母豚の持つ能力を最大限に生かす。母豚の能力によって成績が変わるのは当然ですが、これを引き出す力が、今まさに農場や管理者に求められています。今回ご紹介することは、実は優秀農場では当たり前なことであり特別なことではありません。基本に基づいた管理が確実にできるかどうかを一度見直してみましょう。

### 生産性の低下原因は何か

豚の持つ遺伝的要因以上に大きく生産性を左右するのが管理です。昨年の酷暑は各地で秋から年明けまで様々に豚を痛めました。母豚だけではありません。離乳舎でも大きな豚はそうですし、ほとんどすべての豚の生産性を阻害しました、いずれの農場も夏場対策はそれなりに行っているものの、酷暑によって結果は想像以上の差が出たようです。地域にもよりますが、一般に分娩率、生存産子の落ち込みとして顕著に表われています(下表)。5月の連休直後にはすでに酷暑を思わせる気温が到来しますので、すでにこの辺りから分娩舎にいた母豚の次回分娩率、産子数などが影響を受けたのでしょう。例として示してある



地区も2010年(赤)だけでなく2009年でさえもかなりの影響を受けています。あくまでもある地域での農場平均ですので一概には言えませんが、一部の農場が特に同じ失敗を繰り返していることもわかっており、個々の農場とは必ずしも一致した結果にはなりません。まずはご自分の農場がどのような傾向かを見て、その深刻さを実感する必要があると思います。獣医師等のコンサルタントと相談して、具体的に有効な夏場対策が完全に実行されているか、まだ十分ではない点など詰めましょう。夏場対策としては5月6月までには完了していないといけない問題ですが、詰め切れていないという点では一年中関係する重要なポイントです。農場の立地条件などもあるでしょうが、気持ちを高めていけば、おのずとチェックポイントも明らかになってくることでしょう。風抜けが悪い、熱がこもりやすいという設備上の問題点は生産者もよく知っているはずですが、できる範囲で何がヒントなのかをすでに手遅れだからあきらめたと言わないで詰めて行きましょう。こうした分娩率、産子数の落ち込みは事実、深刻なほど翌年の出荷に影響します。

本来豚が持っている能力が発揮できるような管理とは、豚が期待する環境の提供にほかなりません。温

度や空気の質もあるでしょうし、水や飼料の与え方などもあるでしょう。豚の生理に合わせた提供であれば、極端なレベルまで落ち込むことなく立ち直ることもできるかもしれません。

暑さという共通のテーマをもって、いかに管理が大事かを説明してきましたが、養豚経営の中で重要な繁殖成績の安定のための不可欠な項目を、視点を変えながら触れてみたいと思います。

### 更新豚の育成管理の失敗

初夏に初回種付けを行う更新豚は導入されるのが春先です(大雑把に5か月令で候補豚としての育成が始まり、8か月令で種付けが行われると仮にした場合)。この時期の豚は育種などにもよりますが、一般的には生まれが10～11月ごろですので、前年の初夏に苦勞した母豚の子たちということになります。更



育成肥育期健康な更新豚の作出は重要

新豚の導入育成時期が早春なので、換気や温度に一番気を使うところです。ただでさえ豚が少ないわけですから、少し過保護にいかにも豚をふっくらと育成しがちです。しかし同時に将来の母豚として丈夫な子豚を産むためのしっかりとした骨や内臓ももち備えていなければなりません。見映えを優先しても適切な発情や種付けができないのであれば種豚として農場に定着はできません。肥育期からの別飼(肉豚からの病気を断つ目的)、制限給与ができる環境を整え、種豚あるいは授乳用の飼料(更新豚用専門飼料ならさらに良い)に切り替えて体質改善を計ります。すなわちカロリーを控えてゆっくりと増体させるべきなのです。肉豚の飼料と母豚の飼料は根本的に違うことをまず体感するべきです。ビタミン類、カルシウムやリンなどのマクロミネラル、そして繁殖器の発達を促すアミノ酸や微量ミネラルこそが十分に強化されていなければならないのです。

更新豚は適正な発情が来るまでのボディコントロールも合わせて行っていきます。痩せすぎは禁物ですが、どちらかというとなりに夏場は若干細めの方が安心です。妊娠期にゆっくりと体格作りはできますので、まずはよい発情が来るための管理が先決です。発情予定日が確定したら、そこに向けて数日間ほどフラッシングを行うことで内分泌の働きも良くなり、排卵数の増加も期待できます。

### 種付け後の給餌管理

本来排卵数は遺伝的な要素が大きいものですが、今まで述べた①骨格づくり(十分な日令と体重)、②フラッシング(分娩舎でできるだけ食わせるのもある意味ではフラッシング効果を狙ったもの=代謝が進み、繁殖サイクルが助長されます)と合わせて③適切な性成熟の助長が3つの大事なポイントです。特に更新豚の場合には③も重要です。

種付け後の給餌管理については、排卵から着床までの期間に給餌量が多すぎると受胎率の低下(着

床時に支障がある)が起きやすいということから、種付け後 2~3 日は給餌量を維持量に下げることが昔から行われています。受胎率に差が出ることはデータ上も明確なようですが、種付けから受胎までの日数は 12~17 日かかるため、本当にこのわずかな期間だけで十分なのかどうかはさらに検討が必要だと思います。

### 妊娠期のボディコン管理が何より重要

妊娠期のボディコン管理は後にも先にも非常に重要です。離乳時のボディコンが適正でぶれがない状態が維持できれば、分娩舎で極端に痩せさせなかった(十分に食い込ませた)ということですし、次の分娩までの助走が順調に踏み出せた証拠でもあります。優秀な農場ほど妊娠期間は多少の修正のみ、授乳期間はめいばいに食べさせるという方針で、総量的な栄養を満たしているケースが多いと思われます。



離乳母豚の極度な痩せはなかなか戻らない

母豚の背脂肪厚を測定する時期は、離乳時でも妊娠確定期でもどちらでも構いません。問題はこの数字をどう把握し、農場管理に利用していくかです。豚の特性、地域や餌の質など微妙な差も体感しながらアレンジしていくしかありませんが、この点は日夜管理されている生産者の方々に勝るものはありません。よい成績を出せる管理者は優秀です。是非、周りにいらっしゃる優秀な成績を出している生産者からヒントをもらい、創意工夫に満ちた管理を実行しましょう。微妙な差が実は大きな差となることも意外と多いものです。成績を出せる環境を豚は好み、それは信頼できる管理者が提供してくれていることすら豚は知っているとは私は信じています。

昨夏のような酷暑や湿度が尋常ではない場合には、豚も大変ですが、むしろ管理者が漫然と管理をしてしまうことを忠告したいと思います。こうだと思ったことは必ず実行し、豚にそれでいいかを確認すること、決して管理者目線で忙しいから棚上げにしてしまうとか、ミスを見逃してしまうことのないようにすれば、おのずと成績は上がってくるはずですし、少なくとも大きな落ち込みはなくなると思います。

様々な要因で成績を落とすことに鈍感になってしまっている農場は、管理者に不足があったり、むしろあまり農場に入っていない(豚と接していない)ことも多いものです。管理の質的な面でうるさいぐらいに固執しましょう。結果が全てです。

### 分娩舎でいかに食い込ませるか

分娩までの綿密な管理の集大成が、母豚の分娩後の肥立ちや食い込みに影響し、その後の繁殖成績

に影響することもすでに良くわかっていることです。特に酷暑を分娩舎で過ごした豚に対して、冬～春と同じスタンスで管理した場合はかなりの落ち込みが予測されます。暑さ対策は暑くなる前にしっかりと準備し、夏場モードの体制を作って本番を迎えることができるかどうかです。些細なことですが大きな違いを生みます。

特に母豚が必要とする栄養は、食べる量が少ないから不足してしまうというのが実態です。エネルギー量、必須アミノ酸やミネラル類も少かりです。特に今後一般的になるだろう高生産性の豚も、さすがに一度にたくさん食えることができません。その為この時期の分娩舎の給餌管理には今まで以上に気を使う必要があります。何回にも分けてあるいは涼しい時にだけ集中的に給餌を行うことも良いですが、実際どれくらい食べているのかを個体カルテで管理しなければ把握できません。食い込ませるためには餌箱を常に清潔に保つことも重要です。これも決して手を抜いてはならない部分です。

日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
給餌量												
目標												
...												

分娩舎で使われている母豚給餌記録: 1日3回の給餌量、目標レベルに黒ラインが

アメリカでは分娩母豚への不断給餌を一樣に勧めています、それは適切な環境条件がセッティングできる場合(30℃を越える気温が連続する等考えられない環境)にこそ可能なことであって、酷暑が常の国では対応がおのずと違ってきますので、別の観点からどうしたらよいかを考えてみましょう。まず空気が抜けるように調整することができないかどうかはいかがでしょうか。

飼養管理だけでなく、飼料そのものの問題もより深刻な影響を受ける昨今です。夏場はエネルギーを補充するため油脂添加しますが、高価な混合飼料類、特にその有効性を確認する必要があります。しかし実際には比較検討等難しいのが実際です。前述したように、最も重要で考えておかなければならない点は、母豚が暑さのために十分な栄養を摂取できない＝何らかの形で追加補充しなければならないという話になるからであって、これを解決する最大の対策が食下量を回復させること、そのために飼料の嗜好性を高める等の対応です。この意味では血しょうタンパク製剤は非常に嗜好性を高めます。

不足しがちな栄養要素を混合飼料で補うのは、できるだけ一時的なものにしておいて、経営的には配合設計の段階で組み入れることが最も経済的な取り組みだと思えます。



場合によっては白っぽく、粉っぽいコーンが流通することがある(左)

しっかりと食べさせるためにもう一つ大事なものに水があります。固形飼料を食べるには3倍量の水が必要なことは肥育豚だけでなく、母豚でも同じです。母豚の食下量を考えると夏でなくても一日 20～25L の水を飲まなければならないはずですが、しかしなかなか普通にはそれほど飲めません。そこで、冷えた井戸水を有効に利用して飲水量を確保し、トッピングのようなものを加えることで嗜好性を高める場合があります。逆に飲水の衛生度を優先し、上水に変更することで食下量を上げたという例もあります。一概に言えませんがヒントとなる材料は農場ごと、管理者ごとに様々で、随所にヒントが転がっていると思います。

母豚を極度に痩せさせないように、哺乳期後半で餌付けをして母豚への負担を減らすことは次回繁殖サイクルを回すために大変助けになる管理です。また離乳後の発情の出方(離乳後 7 日以降に発情が来た時等)によっては、無理に種付けしないで 1 回休ませることも良い結果を生むことでしょう。

こうした個々の管理者の知恵や工夫が適所に実施され、しぶとく継続されていること、これを農場のみんなで検討しながら進めていくことが必要です。動物の管理を嫌がる人は農場に来ないはずですが、仕事である以上、結果が求められますし、よい結果を出すことで継続する動機づけにもなります。農場(会社)に認められれば、ますます良い循環が構築できるのではないのでしょうか。